

序章 罪科の証

……街が……人が燃えている……

これは——夢……いや……違うな。

……シーナ……逃げろ……

これは——現実に起こったことだ。

……嘘だ……夢に決まっている……

これは——オレの過去だ。

これは——忘れもしない忌々しい過去だ……

……意識が現実に戻る。

周囲を見回すと、この世の者とは思えない醜い生物の骸が散乱していた。

ひしゃげた体、ねじくれた鋭い爪、コウモリのような翼……おおよそ美の女神の恩寵を一切受けなかったと思われる醜悪さ。

この生物は魔族という者たちだ。

そして……このオレが殺さなければ——復讐しなければならぬ奴らだ。

思考がそこに到達した瞬間、憤怒、憎悪、悲しみ、苛烈な激情が心の中で、暴風のように荒れ狂う。

——魂が狂気で軋む。

たまらずオレは、胸に揺れる十字架のペンダントを強く握りしめた。

こうしていると落ち着くからだ……

いつからか降り出し始めた雨が、俺の体を打っていた。俺はその中で、罪人が懺悔するかのように瞑目し立ち続

ける。

だが、全身を深紅に染めている返り血が流れ落ちようと、背中に生えた一對の紅い翼が純白に戻りはしない。

オレは、天使だ。

その証である純白の翼は、数多の魔族を斬って返り血を浴び続けたせいで、決して落ちることのない深紅に染め上げられてしまっていた。

——オレの魂と同様に——

『紅の翼』——敵である魔族だけでなく、味方である天使からも、オレは畏怖と嫌悪を込めてそう呼ばれている。

罪深く呪われているオレに相応しい。

自嘲気味な笑みが唇に浮かぶ。

ゆっくりと……紅の翼をはためかせ、オレは大空へ舞った——



薄暗い闇に覆われた世界……だがその闇は、何か物質的に——まるで生きているかのよう——濃密でまわりついてくるようだった。

常にこの濃密な薄闇が漂う七層の世界——魔界——こそ魔族の住んでいる場所である。その環境は過酷を極めている。それ故に彼ら魔族は、太陽の光さす天上界・地上界に惹かれていた。そしてただただ、今の自分たちの境遇を呪い、天を仰いで夢を見ていた。かつて自分たちをこの地に追いやった天使たちや、何も知らないでただ安穩と幸せに暮らす人間たちを蹂躪する夢を——

最も深淵の層に位置する城『万魔殿』には魔王サタンと側近の『死凶星』と呼ばれる七人の魔族がいる。弱肉強食の地獄絵図が展開される世界に

あつて、彼らの支配体制は数千年の間全く揺らぐことはなかった。それは、彼らの圧倒的な力であらわれでもあつた。

その『万魔殿』の一角で………

「ガルガリン、その『紅の翼』って、どういうヤツなの？」

パクパクとお菓子を食べながら、好奇心で目を輝かせている少女が言った。舞踏の衣装を連想させる動きやすそうなドレスを着た、見るからにお転婆そうな少女だ。

——と言っても、いくらその外見が人間の十代半ばぐらいの少女だったとしても、実際は何千年と生きているはずである。ましてや『万魔殿』にいるという事は、かなりの高位の魔族なのを言うまでもない。

「最近活躍している天使のあだ名ですよ。返り血で全身が常に紅く、その翼は深紅に染まり、もう

純白に戻ることがないそうです。そこからきたんでしようね。彼には、地上界にいる仲間がたくさん殺されてますよ」

ガルガリンと呼ばれた、二十歳ぐらいの男の姿をした魔族が言った。ガルガリンは、雪のように白い髪と肌をしていて、その身には漆黒の服を着ていた。

「ふくん……で、強いのか？」

少女の、猫のような目が鋭い光を帯びる。紅の瞳が、一層輝きを増したようだった。

「遭遇した仲間は、ほぼ全て抹殺されてます。まあ、他の天使に殺されたものもいるかもしれませんが……死体は何も語りませんからね……」

その光にあくまで気づかないふりをして話を続ける。

「ただ……彼に殺された者の死体の損傷は激しいですね。まさに徹底的に殺すという感じですよ。今は亡き人間どもの言葉を使うなら、肉屋で吊され

ている解体された豚ですかね」

ガルガリンの脳裏に、哀れにも《解体された豚》の姿が浮かぶ。無惨に四肢を斬り裂かれ、頭蓋を叩き潰され、個々の判断ができないぐらい肉片と化した死体——

魔族でさえ吐き気を催す残酷な殺し方だった。

（よほど魔族が憎いんですね。それにしても……あの時の少年がここまで強くなるとはね）

「ナニ笑ってんのよ？ 仲間がやられて悔しくないので？」

「そう言うあなたは、仲間の仇にかこつけて暴れたいだけでしょ？」

「バレたか……」

不機嫌そうに唇をとがらせ、長く美しい光沢の緑色の髪をかきあげる。

——その時。

「謹慎中だろうが、テメエは！」

乱暴な言葉とともに、窓が、これまた乱暴に開

かれた。

入ってきたのは、巨大な体軀の狼だった。その狼は全身が濃い藍色の毛に覆われていて、背中には漆黒の翼が一对生えていた。そしてその特徴的な赤眼からは今にも火が噴き出てくるような勢いで、少女を睨みつけている。

「マルコシアス様……とりあえず窓からではなくドアから入ってきてくれませんか？」

もう慣れていいのか突然の闖入者に対して驚きもせず、ため息一つついてガルガリンは注意した。

「悪いな、ガルガリン。クセなんだよ。それより、集会だぜ」

全く悪く思っていないようにマルコシアスという名の狼は謝り、少女に向き直る。

「議題はあゝ？」

今にもアクビをしそうならぬ、気怠そうに聞く。

「少なくとも、オメエが間違えて仲間を吹っ飛ばしちまった新兵器についてじゃないだろうよ」

マルコシアスが、器用に顔を歪ませて嘲笑った。「もつともつと強いヤツが相手だったら、上手くいったよ！」

「そう思いたいのが、まあ、その前に自分が吹っ飛ばないようになあ」

舌を伸ばし、小馬鹿にするようにブラブラさせる。

「こ……このバカ犬……去勢されたいの？」

「オレは狼だ！ この貧乳！」

「あの……集会があるなら早く行った方がいいんじゃないですか？」

慌てて二人の間に入るガルガリン。

放っておくと取っ組み合いが始まることを、あまり長くないつきあいでもわかっているからだ。

その行為は今回も無駄になるのだが……

——ズズンッ………!!

「この鈍い振動と爆発音……またか！」

見る者に爬虫類を思わせる鋭い目をますます鋭くさせて、青髪の青年が怒鳴った。

「どうかしましたか？ バルザシアス」

その隣で本を読んでいた、金髪碧眼の青年が聞く。怒鳴った青年とは対照的な、見るからに人畜無害で穏やかな感じのする青年だった。

青髪の青年は粗雑な動きで漆黒のマントを翻して、金髪の青年の方に振り返る。

溢れる怒りで全身が震えていた。

「毎度毎度の問題児同士のケンカだ！」

バルザシアスという青年は、やれやれといった感じで頭をかく。彼のやや伸ばし気味の青い髪の中から、後ろに反るように二本の角が生えていて、

さらにその耳は不自然なぐらい尖っていた。

そう——彼は人間ではなく、本性は青竜である。

その隣にいるホンワカとした白い服の青年は、ルーベランという名の墮天使だ。

二人は、魔王サタンの腹心である七人の魔族

——『死凶星』^{ブレアデス}——である。

そして、間もなくこの場にくる魔族も——

………数分後………

「——おい、他の三人はどうしたんだ？」

「聞くまでもねえだろう。サボリだよ」

バルザシアスの問いに、さも当然だというふう
に問題児の一人であるマルコシアスが答えた。

結局集まったのは、青竜バルザシアス、墮天使

ルーベラン、魔狼マルコシアス、そしてガルガリンの主である少女——リリス——だった。

『死凶星』^{ブレアデス}は全部で七匹の魔族で構成されてい

る。今ここにいないのは、魔軍の陸上部隊を統括するベヒモス、水軍を統括するレヴィアタン、魔軍の中でも特に精鋭を集めた殺戮部隊を統括するアラストルである。ちなみにバルザシアスは空軍を、ルーベランは墮天使部隊をそれぞれ統括して、リリスとマルコシアスの二人は遊撃部隊を勝手に作ってあっちこっちでいざこざを起こしているのだった。

大きな円卓を囲んで四人がイスに座る。

「——でさ、今日はナニよ？」

「最近、地上にいる兵士たちが『紅の翼』という天使に惨殺されているのは知っているだろう？ その被害がひどくなる一方で、サタン様がお嘆きになっている。そこで、その天使に対する対策を考えてほしい」

バルザシアスの、金色の瞳が爛々と輝く。まるで、獲物を狙う蛇のように——

「まあ、要するに、目障りな天使がいるから迅速

にブツ殺せということですね」

その物腰とは正反対なルーベランの言葉。

彼は、あまり物怖じしないリリスでさえ驚愕するような過激な言動をとることがある。

「じゃ、ボクがいく♥」

全身から喜々としたオーラを発散させながら挙手したのは、リリスだった。

「全身全霊をこめて、却下っ！ 大体、お前は例の新兵器の暴走事故の責任で謹慎中だろうが！」
予想をしていたのか、バルザシアスは物凄い勢いでまくしたてる。

だがそれに屈するようなら問題児の名折れとばかりに、リリスも引かない。

「ブーツ！ 敵だつて倒したもん！」

「それが普通だ！」

「でも……」

まだしつこく食い下がらないリリスを無視して、バルザシアスはマルコシアスを見る。

「オレは別にいいが、グレモリー様が……」
頭を数回横に振って、微かに聞こえる程度の大
きさで言った。

グレモリーとはリリスの妹で、『死凶星』の一
つ下のランクである『魔将軍』の一人だ。彼
女は神秘的な力と雰囲気をあわせもつ少女で、外
見ならリリスより二、三歳上に見える。

今から数百年前、地上にお忍びで旅をしていた
グレモリーは一匹の瀕死の子狼を拾った。その傷
は深く、このままでは手当しても死んでしまうと
考えた彼女は、自分の血を飲ませたのだ。そして、
その小狼は命をとりとめたばかりか、体は急成長
し、背中からは翼が生え、想像絶する巨大な能力
を発揮するようになったのだ。

それが——マルコシアスである。それ以来、マ
ルコシアスはグレモリーを命の恩人として慕い、
彼女もまたこの狼を自分の側に置いてかわいがつ
た。

だが彼女は争いを好まない性格ゆえに、マルコ
シアスと姉リリスを戦地に行かせたくないのだ。

「モリーって優しすぎるんだよ……」

リリスの小さな呟きに、マルコシアスが黙って
頷く。

「俺とルーベランは別の任務があるからな……俺
としては、ベヒモスカアラストルあたりに行つて
もらいたかったんだが……」

バルザシアスは、腕を組んでうなづいた。

その腕をルーベランがつついて、

「私にいい考えがあるんですが……」

満面の笑みを浮かべながら言った。

三

会議が終わり、リリスとガルガリンはグレモリ
ーの部屋で話し合っていた。

グレモリーは『魔将軍』の一人だけあって、

人間ならば貴族レベルの生活水準といったところだろう。しかし彼女の部屋は豪華と言うよりは女の子らしい人形などの調度品の多い部屋で、とても『魔^{デモンズ・ジェネラル}将軍』の一人とは思えなかった。

「——ってコトで、アンタが『紅の翼』抹殺に適合してるとルーベランが提案したのよ」

「はあ……そうですか……」

ガルガリンはたいして気のないような返事をし、優雅な動作で口元にティーカップを運んだ。

「姉さん……」

リリスの隣の車イスの少女が、悲しそうな表情をする。

リリスと同じ紅い瞳に、淡い紫の長い髪の毛のこの少女こそ、マルコシアスの主人であり、リリスの妹のグレモリーである。見るからに元氣な姉と違い、可憐なドレスに包まれた華奢な肢体は、守つてあげたくなるような儂い美しさがあった。

「ナニ？ 紅茶ならおいしいケド？」

きよとんとした顔のリリス。

グレモリーの言葉に含まれた非難に全く気づいていなかった。

魔族にも天使ほど絶対的ではないが、自分より地位が上の命令は、服従しなくてはならない。

それでなくてもガルガリンは優しく穏和な性格だ。話を聞いて断るわけがないことをグレモリーはわかっているのである。

「ええ、グレモリーさんの入れた紅茶は、いつも絶品ですよ」

ガルガリンは、大丈夫ですよ、とでも言うようにグレモリーに微笑む。

「『紅の翼』抹殺、引き受けましょう」

「じゃあ、早速で悪いケド、地上に行く用意をしてよね」

リリスの言葉に、ガルガリンは昔に思いを馳せた。

（懐かしいですね……何十という国を滅ぼし、何

千何万という人間を殺してから、もう半世紀……彼と初めて会ったのは、その時だった。彼——『紅の翼』と………)

数年前のことだが、実はガルガリンは遠見の魔法で『紅の翼』が戦う姿を見ている。

復讐のためだけに生き、剣を振る修羅のような姿にゾツとするほどの美しさを感じた。

(もつとも、彼を復讐鬼にしたのは私ですがね……彼の想い人を殺したのは………)

今でもその時のことを思い出すと、自然と笑みがこぼれる。

守れなかったという罪悪感と悲しみと絶望に打ちひしがれる彼の姿を思い出すと——

(決着をつける時がきたようですね……)

いつになく高揚する感情を何とか押し隠し、部屋をあとにした。

「それにしても……エへへ、遊びがいがありそうだね」

手近にあった羽のはえた狼——マルコシアス——のぬいぐるみを抱きしめながら、リリスが無邪気に、だかどこか魅惑的に笑う。

彼女の言う遊びとは、もちろん殺し合いのことである。

純粹に戦闘の技術ならば、彼女はおそらく魔族一であろう。それを証拠に、今まで何人もの屈強な天使が哀れな遊び相手に選ばれ、完膚無きまでに壊されているのだ。

「ちよつと……姉さん謹慎中でしょうか？ サタン様に許可を求めないの？」

慌ててグレモリーがクギをさす。

それに対してリリスは、先程よりも数倍魅惑的な笑みを浮かべるだけだった。

(いいかげん……もう、わかってたけどね………)

グレモリーは深く深く……ため息をついた。

「なかなか面白くなりそうですね？」

子供のようにクスクス笑うルーベラン。

対照的に、バルザシアスは慄然とした表情をしている。

ここは先程まで集会が行われた部屋だ。今は彼ら二人しかない。

「だが、相手はあの『紅の翼』だぞ。あいつに勝算はあるのか？」

「ガルガリンは幻術を得意としてますから、勝ち目はバツグンです」

ルーベランは自信があるのか、平然と言い切る。
(幻術って……『紅の翼』に効果あるのか?)

バルザシアスは訝しげな顔をしながら顎に手をあてて思った。

「確かに『紅の翼』の純粋な戦闘力は『七大天使』並に強力でしょうね。ですが、その心は脆弱。そ

こをつけば、勝算は十分あると思いますよ」

そんな心の内を読みとったかのように、ルーベランは言った。

「脆弱……？ ヤツの心が？」

『紅の翼』に殺された仲間の死体を何回も見してきたバルザシアスは、ますます訝しく思う。

八つ裂きにされた四肢が埋め尽くす大地。

鼻を突くような強烈な死臭を伴った空気。

——紅一色に染まった世界——

幾度も修羅場を乗り越えてきた彼も、思わず顔を歪めてしまった。

何より、死体にこびりついた『紅の翼』の残留

思念に触れて——

「彼の心には、憎悪と殺意の……復讐の炎が、自らを焼き尽くさんばかりの勢いで燃えています。しかし、それこそが彼の強さの象徴であり、同時に弱さの象徴でもあります。後は——見てのお楽しみといったところです」

「お前……何か知っているだろうか？」

何かを含んだような物言いに、バルザシアスはピンツときた。

「実は……調査を進めていた『紅の翼』の素性がわかりました」

ルーベランの言葉に、バルザシアスは驚きで目を丸くした。

なぜなら『紅の翼』の素性については、いくら調べても謎のままだったからだ。さらには、仲間の天使たちも彼の過去を全く知らないようなのである。まるでその存在自体が機密のように……

それにしても、いつの間にもそのような調査をしたんだとバルザシアスは舌を巻いた。

「それでですね。実に驚くべきことに、私たちの中に彼とほぼ同じ経歴の持ち主がいたんですよ。誰だと……思います？」

「俺がそういうことを考えるのが苦手なぐらいわかってるだろうか？」

自慢にならないことを偉そうに胸を張って答えるのを見て、ルーベランは苦笑する。

「そうでしたね、すいません。それよりさっきの話ですけど、なんとあのガルガリンなんですよ」

「ということは、ヤツもそうなのか？」

ルーベランは黙って頷き、

「だからこそ——魔族に対してあれほどの憎しみを抱けるんですよ」

ルーベランは静かに呟くように言って、衝撃の事実に愕然としているバルザシアスを一瞥し、視線を窓の外に移した。

荒れ果て荒涼とした大地の上に重くのしかかる
鈍色の空――

その空は薄暗い雲に幾重にも覆われていて、時
折稲妻が走っていた。その向こう側がどういった
様子なのか全く見通すことなどできない。

それはまるで……何者かが真実をかたくなに覆
い隠そうとするかのように見えた。